

全体の質疑

質問者A 先ほどの鯨岡先生のお話は、養育する人と子ども、その関係から周りにいる他者、それから公共性とか、ほかの養育者の方という話だったと思います。そういうところに話が展開していくにつれて、一対一の関係の中で.....お互いの主観性の中で出会っていくものだけではなくて、場というものをどうやって記述していくかということに、つまり子どもたちと接している場がどういうものなのかというのを、周りの人々、取り巻いているものとかを含めて記述するということに、私は関心があります。鯨岡先生の理論の中で、広げていくというか、場というところまで記述していこうということを考えたときに、どういうふうに間主観性などがそういった記述につながっていくかということをお聞かせ願えないでしょうか。

鯨岡 そうですね、どこでお答えしていいのかちょっと苦しみますけれども、例えば間主観的な関係というのは、まさに一対一の間で、あなたが今思っていることをわたしはこう感じているというところですよ。で、その二者関係を、いかに周り.....共に生きるほかの人たちが支えているか、そこに踏み込んでいきたいですよ。で、しかも、もうひとつ、インター・サブジェクティヴィティの問題は、そういう狭い二者間で感じ取ることができるというところに表れてくる面と、もうひとつは共同主観性という形で、もっと目に見えない形で誰にも共通するものとして現れてくる面がありますね。例えば、規範とか価値観とかですね、そういう部分があると思うんですよ。だから今、ある人がある人を前にして、間主観的に感じ取るということを、実は共同主観性が下支えしているということが本当はあると思います。そこはなかなか見えないところなんですけどね。でも、ひとつの出来事を深くメタ観察していくと、そこがずるずると出てくるというようなこともあるんですよ。で、しかし、それはインター・サブジェクティヴィティという言葉の使い方の難しいところということでご理解いただくとして。

今の質問者の関心に沿って言うならば、エピソード記述の中で、背景をどんなふうにかくかということに直接かかわってくることじゃないですか。ね？ わたしとあなたの今ここでのこういう関わりや、あるいは、わたしと何人かの子どもとの関わりが、より大きな

関係の場によって影響を受けていたり、支えられたりしているということがあります。

例えばエピソードを書くときに、背景をどんなふうを書くか、ということにそれが関わってくるんですね。例えば、わたしのクラスはこうこうこうで、というふうにして、その背景が書かれ、そして、わたしのクラスの中で子どもとわたしは、というふうにして、あるエピソードの場面が出てきます。その背景の分厚さの中に、わたしとその人との関係を下支えしているものが描かれていく。たぶんそういうところに、一対一を超えた関係が描きこまれていく可能性はあるんじゃないかなと思います。

もっと広く、全体を図にしていくということは非常に難しいと思うんですね。どうしてもエピソード記述の良さというのは、やっぱり、ある子ども、ある人のこういう気持ちの動きを、クローズアップするところにある種のメリットがありますよね。それを全体をとりあげるかたちでやってしまうと、ぼやけてしまう。その全体が、でも、一対一を取上げていくときには、下支えしているものとして必要になってくる。それは結局、背景を分厚く描きだしていくということになるのでしょうか。今、そちらの質問を聞いて、すぐ直感的に思ったことはその程度です。そんなんでいいでしょうか。

質問者A ありがとうございます。

司会者 どなたか。

質問者B 元保育者で、今は保育者養成にかかわっています。よろしくお願いいたします。遠藤先生と鯨岡先生にお伺いしたいと思います。まず、遠藤先生にお伺いしたいのが、先ほどアタッチメントのところで、情動の共有と制御というものがすごく大事なんだというふうに受け取りました。今までのというか、今の時点での繋合希求欲求、要するに見通しとして繋合希求欲求が満たされるという中で自己充実欲求が出てくるというように、両者が表裏一体になっているというふうにはわたしは先生のお話を理解したんですけども、それでよろしいのかどうかということ。かりにそうであるなら、結局、鯨岡先生の主体の議論のところで説明があった「私は私」と「私は私たち」について、愛着理論において二つの欲求が表裏一体になってしまっているということは、「私は私たち」の視点が欠けているということなのかな、というふうに理解しました。そのへんのところについて遠藤先生のお考えを伺いたいと思います。

それから鯨岡先生にお伺いしたいのは、子どもを対象化しないということとの関連で、時間の流れというのはすごく大切なことだと思います。鯨岡先生のお考えの中には、時間の流れというものが考慮されているなというふうに感じます。それとの関連で、先ほど、

主体というものを捉えるときに、時間との関連で主体というものを捉えると、それをどういうふうに語れるのかということ、それから深みのあるエピソード記述といったときに、時間の流れとの関連で語るとどうなるのかということ。さらに一点、先生はよく著書の中でも、発達心理学の原罪というかその罪は、子どもの心というものを忘れてしまったところにあるということをおっしゃられていたと思いますが、先生にとって子どもの心といったときに、その心というものがやっぱり個体内に還元されるものなのか、それともやはり関係の中で出現していくものというふうに捉えられるものなのか、そのへんのところの先生のお考えを教えていただきたいと思います。

司会 遠藤先生からお願いします。

遠藤 答える前に少し思い出したことがあります。前、鯨岡先生のご講演か何かを、もう10年以上前ですかね……ご講演だったのか、学会の中のワークショップのような中でのご発言だったのか、ちょっと定かではないのですが。愛着研究の、それこそ回避型とか、あるいは安定型とか、アンビバレント型というような話が出てきたときに、鯨岡先生が……もしかしたら本当はそうおっしゃってないのかもしれないんですが、わたしがすごく印象に残っているのは、鯨岡先生が、Bタイプの安定型のお子さんというのが、「話を聞いていても何かピンとこない」というか、もしかしたら「物足りない」という表現だったのかもしれないです。で、むしろ、Cタイプのアンビバレント・タイプの子どもたちのほうが、ある意味、非常に「自然な振る舞いとしてよく分かる」というようなお話をされたことがあったように記憶しているんですね。特に日本的な感性でいうと、例えば12ヵ月とか18ヵ月の子どもが、逆に、ある種しがみついたりとか、逆にいうとそういうふうな態度を見せてくる子どもを、例えば養育者のほうがすごくかわいいと思ったりとか、というのが自然なんじゃないか、という旨のご発言をされたことをすごく記憶しておりまして、自分も実は直感レベルではそうだなとすごく思うわけです。

だから、そういうふうな意味からいうと、要するに愛着理論の少なくとも表面的な部分で、根源的な両義性というふうにいったときに、Bタイプという安定型に関していうと、逆に整合的な希求性・希求欲求というものと自己充実欲求というものに、引き裂かれない状態にあることを、ある意味、定型的で健康的というふうにみなす見方というのがあるようです。そして、それは、かなり文化的なバイアスがかかった見方なのかもしれないなというふうに思うところが実はあるんです。

で、先ほどのご質問からいうと、結局、愛着理論の中では、見通しとして、整合希求欲求が確実に満たされそうだなというような見通しを持っている子どもが、自己充実欲求とい

うのを十全に発揮できるという考え方なんですよね。だから、今ここで繫合希求欲求というようなものが、現に身体的にある今、ここにお母さんがいて、そのお母さんにくっつきたい遊びたいという意味での相克がないとかという意味ではなくて、愛着理論の場合は、先ほどから申し上げてますが、内在化されたもの、要するに内在化されたお母さんが想起され、お母さんにはいつだってくっつけるというふうな見通しが成り立っている状態こそが、自律性が発揮できる状態だという考え方。実はこれは、鯨岡先生のお考えの中に、ある意味含みこまれている考え方でもあるんです。ただ、表面的にいうと、そこに相克を認めないというところが、アタッチメント理論のある意味不自然なところでもあるし、もしかしたら、日本人的な感性からいうと、「あれ？」というふうに思われるところでもあるな、という気がして。

それが例えば、その主体性というようなものを、本当に説明するのか。もっというと、逆に引き裂かれているからこそ、主体というものが意識され、わたしというのが意識されるというのが、やっぱりあるという。そこをたぶん、鯨岡先生は、本当は強調されているんだろうなという気が、個人的にはずっとしてるんです。だから何かある意味すごく、子どもを大人びた存在として仮定してしまっているようなところが、愛着理論の、少なくとも非常に機械的な類型化の中にはあって。それがすごく、理屈で分かるところと、すごく直感で分からないところ……個人的にはすごく混在してるということです。

ただ、意味的なレベルでいうと、先ほど申し上げたように、表象レベルの中で、もうくっつけるという、欲求が満たされるということが確実な状況で、自己充実ができるということを愛着理論は仮定してるんだということですね。それができないと、いわゆる不安定型の愛着になるんだということですね。アンビバレント・タイプというのは、まさにそれが両方活性化されて、要するに、とにかくくっつくというほうの欲求というところが、ある意味、優位化しているというふうに記述されるわけですね。アンビバレント・タイプというものは、結局、何かしたいし遊びたいけども、お母さんどこかにいなくなるといけなからお母さんにしがみついている、という繫合希求欲求のほうに優位化しているというふうに。一方、回避型というのは潜在的にくっつきたいけれども、繫合希求欲求というのは満たされないという見通しが強いから、ある意味、自己充実欲求を、仮に偽りのものとして、ある意味優位化させてしまうというようなものとして、実は記述されていると理解できるかもしれない。あと最近いわれている無秩序タイプとかというのは、結局両方同時に達成されて、両方実現できないから止まっちゃって、フリーズしまった状態というふうに理解できるかもしれない。だから、実は繫合希求欲求というようなものと、自己充実欲求というものの枠組みを借りて、アタッチメントの類型というのを説明すると、すごく、ある意味納得がいくことがあるんです。ただそれが、でも本当にわれわれが日常的に感じて

いる、この子ども普通だなというような感覚と、そのBタイプというのがヘルシーだというふうな理論的な考え方って、どれぐらい本当の意味で合致しているのかというと、すごく怪しいなというふうに思うところもあります。ちょっとお答えになっているかどうか分からないんですが、そういうことを少し考えました。

鯨岡 今、遠藤先生が10年ほど前にわたしと言ったという内容はそのとおりです。記憶違いではありません。わたし、例えばCタイプといわれる子は、お母さんが戻ってきたときに、いわゆるBタイプのように喜んで迎えて、そしてまた遊びに戻ってというのとは違って、泣きやまないでお母さんを叩きにいったりする。わたしはそういうCタイプに分類されている子どもを見ると、「わたし、小さいときこれだったかな」と思っちゃうんですね。

「何で行っちゃったんだ」、「何で戻ってこなかったんだ、腹立つ」って、1歳でもお母さんに対して叩きにいく。それが、お母さんに対して自分がくっついているということの強い表現じゃないのか。簡単にそこで、何で「戻ってきたからうれしい、さあ遊ぼう」というふうになるのか。そこが何でヘルシーになるんだってね（笑）。そういう気持ちがわたしの中にずっとあって、この分類って何を分類しているんだろうってね、ボウルビィの本や、エインズワースの論文を読んでいるときから引っかかっていたことだったんです。

わたしの質問に戻りますけれども、時間の流れの中で主体をどう考えるのか、ということですけど、これをわたしは、主体として受け止めてといると、主体に「なっていく」、「育っていく」、そういう言い方をしていますね。『ひとがひとをわかるということ』の中で少し触れていますけれども、「ある」と「なる」という言葉を使ってそこを説明しようとしています。つまり、わたしたちが今の「ある」という状態、今のあるがままですね、それをそうだというふうに受け止めてもらうことで安心できる。で、自分が肯定されたと思う。で、そういう自分の主体としてのあり様が、そこで受け止められることによって、実際、今を越えていく力が内から湧いてくる。それによって一歩前に進み、だんだん大人に近付いていく。いまの「ある」が一歩動いて「なる」に向かう、と。つまり、「ある」を受け止めてもらって「なる」に至り、そのなった「ある」を受け止めてもらって、次の「なる」に向かう、というふうにして、だんだん主体が時間の中で変容していく。で、その変容は必ず幸せになっていくことを意味するわけではなくて、むしろ、幸せと苦難とがよじり合わされて、ますますよじり合わされていくという意味で、厚みを増していくというような言い方をしていますけどね。わたしは主体の形成のプロセスというのは、そういう時間の動きの中にあるものだろうという理解をしています。

それから、発達心理学の罪は、子どもの心を忘れたことだというのはその通りなんですね。しかし子どもの心というのは、決してひとりの子どもの内部に閉じられたものとして

あるわけじゃない。例えば、その子の中に自信があるというときに、その自信というのはその子のものなんだけれども、でもそれは子ども自身でつくることができるものではない。周りの人たちが、その子のことをかわいいと思い、その子のことをいい子だと思ってくれることが、結局子どもの心の中に流れこんできて、それが自分の心になるというふうに考えていますから、実は心に焦点化すると、必ず関係が見えてきます。子どもだけを取り上げて、「あなたの心の中には何があるの？」というふうにして、個体の内部に局在されてあるものを取り出すというわけにはいきません。いつも、周囲に開かれてしまっている。それをどう理解するか。だから心に目を向ければ、必ず、その子が育てられ育っている様が見えてくると考えています。それが、これまでの発達心理学はどうしても個体論的だったという理由です。で、目に見えるところで攻めていこうとしたために、結局、心に目を向けようとしなかった。なぜなら心は目に見えないし、そして周りにいて感じ取ることしかできないものだからです。その子に、今こういう心があるというふうに実体化して押さえることができないわけですね。それはあくまでも、かかわっている自分が、その傍らで感じて分かることしかできない。しかもその心が、周りに開かれてあるということも、感じて分かるしかない。先ほどのわたしの取り上げたエピソードのようにですね。そんなものとして考えているわけですけども。結局それは、これまでの発達心理学がそういうふうにしては子どもの心に接近してこなかったということです。結局は目に見えるところで発達を語ってきてしまった。その発達の考え方が育てる人たちの中に深くしみ込んでしまったから、育てる人たちが子どもの心に目を向けなくなった。これが結局、発達心理学がある罪を犯してきたとわたしが言う大きな理由であります。そんなところでいいでしょうか。

司会者 そのほかいかがでしょうか。

質問者C とても濃密なもので何を言っているかわからないところもあるんですけども。鯨岡先生の理論の中でやっぱり両義性というのはすごく大事な考え方だと思うんです。その中でわたしがひとつだけ、「子どもは育てられて育つ」というふうに、ある意味、一方向のところをタイトルにされているところが、どういう意図なのかなと思いました。

さきほどの先生のお話だと、お孫さんがお生まれになって、ジージになることによって、ジージになるということはこんなに大変なことなんだ、ということで、理論のところには一回転の図を描かれていました。たぶんそれは研究者同士のディスカッションの中でよりも、もっと大きな変化が起こる。ということでいけば、子どもによって大人も育てられているという面が、たぶん、鯨岡先生、両方、光と影とかいろんなものを見ていかれる中で、たぶん育てる側も育つのだということも暗黙のうちに思ってたっしやると思うんです。その

中であえて、「子どもは育てられて育つ」というふうに、今出されているところの意図というか、そういうところも少し教えていただければと思うんですが。

鯨岡 わたしが今、「子どもは育てられて育つ」という表現をしているのは、「子どもは発達する」という言葉と対比してとらえてほしいと思ってこれを出してるんです。「子どもは発達する」という表現と、「子どもは育てられて育つ」という表現とがどう違うか、それを考えていただくといいかな。つまり、「子どもは発達する」というと、何か、子どもが独自に成長変化していくというような感じですね。でも「育てられて育つ」というと、必ずその育てる人、育てられる子ども、必ず周囲が見えてくる。そして「子どもが発達する」というと、個別具体の子どもではなくて、一般的平均的なというイメージが出てくる。ところが「育てられて育つ」というと、一般論として語っているようだけれども、必ずそこには個別具体が浮上してくる。つまり育てられる子どもと、育てる人と。それが結局は、関係の中で子どもは育っていく。もちろん育てる側も育てることを通して育てられていく。そういう関係を含みこんで、さらにそれを子どもの側にもういっぺん引き寄せてみる必要があるなということで、そういう表現をしているんですけどね。

だから、今回こういう言葉を使ったのは、「育てられる者から育てる者へ」という考え方を無しにして、「子どもは育てられて育つ」と言っているのではなくて、そういうこれまで議論してきた世代間の関係というのも全部踏まえた上で、もういっぺん、育てるという営みそのものに回帰してみる。その育てる営みに回帰したときに、まず中心となって浮かんでくるのは子どもの側と、そして、育てる大人の側ですよ。それを今、子どもが発達するという枠組みの中で語ってみるところから始めましょうというだけのことです。とりあえず。決して関係性を薄めていこうとするとか、そういうことではありません。

質問者C そのところで、先生の理論を深く読んで理解していくと、先生の言われている意味が伝わってくると思うんですけど。「育てられて育つ」という言葉は、いろんな読み方ができると思うんです。そうすると子どもは受動的な感じ、「育てられる」というような言葉のところで、そういうふうに注目すると、そういうふうな誤解になってしまう可能性がちょっとあるかなと思うんです。そのあたりは先生が言おうとされているところが多く広く無駄なく伝わるといいなと思いました（笑）。

鯨岡 ありがとうございます。

司会者 そのほかいかがでしょうか・・・それでは皆さんが考えられる間に私が質問をさ

せていただきます。

鯨岡先生の講演後初めの質問で、鯨岡先生が二者関係から公共性へと広げていこうという指向性があるという話をされたことについて触れられてました。いわゆる二者関係という図を広げていく……先ほど鯨岡先生は地を引きずり出すという言い方をされました。確かに地を引きずり出すという言い方もできるんですが、一方で図が変わっていくということではないかと思うんです。わたしたちに見えるものはすべて図なわけですから、地は見えないわけです。そういう意味で、先生が「いつもすでに」と言われている、「いつもすでにそうある」というのは、地に触れている表現だと思うんです。

常に図しか見えない、自分がどういう図を見ているのかとらえようとするときに、メタ観察という言葉が鯨岡先生に使われています。このメタ観察について、大倉さんとよく議論しているんです。そのメタという別の次元から俯瞰したところから、反省をして理解をしていく。そのときに、そうは言うけども、きょう森岡先生が時間性の話をされましたけれども、時間を考えれば、反省した時点で、次の位相に、自分の存在自体はいつているわけですね。そうすると、メタと空間的にとらえるのだけれども、その際には図が変わってしまっている。時間的に考えれば、常に「見える図」しかないわけですから、メタという空間よりもむしろ時間的な変化を変遷としてとらえる図を、よりクリアにというかシャープにとらえていくというような理解の仕方が、わたしとしてはしっくりくるんです。そのへん、さっきの話を引き継いで話させていただいたんですけど、どうお考えでしょうか。

鯨岡 そこはかなりややこしいんですけど。まずひとつ言いたいのは、確かにエピソードの書き方からすると、背景があって、エピソードがあって、メタ観察があって、起こった出来事に対して、後からメタ観察をくっ付けたという感じですね。でも、論理の上ではそうなっていますけれども、たぶん書くという側からすると、実はメタ観察は相当進んでいるから、これを取り上げようということになる。だから、例えばそこがエピソード記録とエピソード記述の微妙な違いにもなるんですけど。「これだ」と思って、その日のうちに書き留めておくメモとしてのエピソード記録があるでしょ？ で、それを、「これだこれだ」と思ってその記録を読んでもうちに、いろんなことが浮上してきますよね、自分の頭の中に。で、これを読み手に分かるように書き直してみようというときに、すでにメタ観察はかなり働いていますよね。だから、背景から書き起こしてというけれども、実はそのときにはもうメタ観察がかなり頭の中で整理されていてね。だからエピソード記録がその観点から少し……起こった出来事が変形されるというのではなくて、その図の取り方自体がそのメタ観察によって、若干の変更が、力点の置かれ所が、ちょっと違う所に置かれたり、そういうことが起こってきます。

だから、メタ観察は、一片のエピソードを書き上げてから、その後に付くという理解ではちょっと困るかなと。ある意味でメタ観察が後で気がつかれて、その結果、エピソードがより鮮明に自分の中に浮かび上がってきて、「これだけは絶対ほかの人に伝えたい」と思うようになったりね。そこが、なかなかうまく説明できないところなんですよ。『これが面白い』と思ったから取り上げようとしたんだけど、取り上げかけてみるともっと面白いことが見えてきて、さらに……というようにところがある。だから、何回も何回も、エピソード記録はそのままだけど、エピソード記述は書き直しが可能なんですよ。そしてそれで自分のメタ観察との兼ね合いの中で、エピソード記述の中の出来事がより自分にとってシャープになってくる。そういうプロセスがあると思うんですけどね。

司会者 簡単な話なのですが、私がこだわってるのは、メタというと、次元の違う視点から見るというか、空間的にとらえてしまう点なのです。

鯨岡 そうじゃない。むしろ時間的です。だから、過去に取り上げて論文化したエピソードでさえ、何年か時間が経って、自分の理論構築が進んできたときに、「ああ、あのとき取り上げたエピソードはもっとこういう意味があったはずだ」というふうに、取り上げ直すということはあるんですよ。それはやっぱり、エピソードの意味というのは、そこに客観的にある意味として固定されているわけじゃなくて、常にまだ変動する可能性を持っていて、それは書き手である自分の抱えている理論の煮詰まり具合、煮詰まり具合というのは時間の変容の意味ですけども。だから、それによってずいぶん違ったところにも焦点が当たりうると思うんですね。それと、例えば子どもについての理解が、1歳のときにはまだ付き合って半年ぐらいでよく分からなかったのに、付き合いが3年5年と進んでいくにつれて、「この子はこんな子や」とか、「このお母さんはこんなお母さんや」という、そういう理解が深まっていくと、いろんなものが見えてくるでしょ。だからそういうエピソード記述には、登場人物のいわば背景として時間的な積分された歴史というのものがあって、それを取り上げるのは今この場面なんですよ。今この場面なんだけど、背景にはずっとその人と付き合ってきた歴史があって、それが今この場面をこういう形で切り取らせ、またこの場面に対してこういう意味を連れてくる。そういう考え方をしているので、その時間の積み重ねの中でというのはなかなか紹介できないところなので、これは背景の中に描きこまなければいけなかったり、あるいは、それを、3歳のときはこういうエピソード、5歳のときはこういうエピソード、7歳のときはこういうエピソード、これをつないでいくと、というような手法を取らなければならなかったり、表現の仕方はいろいろ出てくると思うんですけど、基本的には時間の問題ですね。

司会者 そうですね。しつこいですけど、もうひとつ。きょう、いちばん初めに私がこの企画をした趣旨を話した際に言及した鯨岡先生の「生きられる還元」という考え方は、私は（鯨岡理論の）骨子ではないかと思ってるんです。他者に出会うこと、もしくはあるタイミングにさしかかること、そのときに、「こういうことだったのか」とか、その子の見え方が新しく変わっていく。その理屈は分かる……むしろわたしはそちらのほうにびったりきます。

それであれば時間の軸で見てるといえるという点は了解するんです。一方では現象学の理解、私は現象学に詳しいわけではありませんが、反省的に見る、超越的に反省的に見るというのが、自分を自分で見ていくという、そういう視点の置き方が、鯨岡先生がメタという言葉が使われることに、名残りとして残っているのではないかと思うんです。これは私の理解ですけども、いかがでしょう。

鯨岡 メタっていうのはそんなにわたし、松本さんが考えておられるほど重みを置いて使った言葉でなくて、だから最近あんまりメタ観察といわずに考察とかね、簡単に言ってしまうことがあるんだけど。なぜメタ観察と言ったかという、『関係発達論の構築』の中でもそうだったと思うんですけど、つまり、第一次メタ観察、第二次メタ観察といっているときに、たぶんメタ観察という言葉を多用していると思うんですね。エピソードを読者に分かってもらうために、背景は書いているんだけど、それだけでは分かんたろうと思うわけですね。だからエピソードにもう少し、「ここでこう言ったのが実は自分がこう思っていたからだ」というようなね、エピソードを補足するようなコメントを付けるところを第一次メタ観察というふうに呼びましょうと。これに対して、理論的に省察（しょうさつ）する、あるいは津守流に言えば省察（せいさつ）するというのを、第二次メタ観察というふうに呼んでいます。だから観察したものをエピソードと呼ぶときに、その次元の違うところについて何というかというときに、軽い気持ちでメタ観察という言葉を使って一次と二次と切り分けた。で、最近是一次二次と切り分けるのは面倒くさいし、それは考察の中で触れてもらってもいいし、ということで、あんまりメタ観察という言葉を使わずにいます。だからエピソードとその背景とエピソードの考察とでもってワンセットという言い方に今、だいぶ変わってますけどね。でも、メタ観察であることには変わらないというふうに思ってるんですが。

司会者 はい。ありがとうございました。そのほかないでしょうか。はい、それではどうぞ。

質問者D　今お話があった、メタとか、わたしは難しいことはよく分からないんですけども。二者関係からもっと広い意味での「育てるもの」の枠を広げていくという話がありました。間主観的關係をとらえるに当たって、参与観察をしている研究者だとか、親子を見守っている保育者の方の視点からとらえた間主観性ということと、育てる本人ではなく、親を見守っている血のつながった狭い意味での親の親、祖父母が間主観性の關係性をどう生きているのかということをつめるにはどうすればいいのかという点、鯨岡先生のお考えをお聞かせください。

鯨岡　ちょっと、ご質問の主旨がつかめないところがあるんですが、例えば、母と子が今そこでかかわり合っているのを第三者であるわたしが研究者の立場でどうつかむことができるか、どう感じ取ることができるかというところで、二重の間主観性ということをいつてるわけですね。お母さんが間主観的につかんでいることを、研究者であるわたしがどう間主観的につかめるのかという形で、その三者の問題として議論してるわけですね。ただ、たぶん、お母さんはこの子の気持ちをこんなふうに掴んでいるということを、例えばおばあちゃんが掴んでいるというふうなことは、十分ありうることですね。それを、そこに居合わせたわたしという研究者がその三者の關係を間主観的に・・・となっていくと、だんだん研究者は付いていけなくなりますよね。だからどうしても間主観的關係を研究者の立場でちゃんと掴めるところというのは、実際に子どもに直にかかわったときの子どもの気持ちとか、子どもにかかわっている今のお母さんの気持ちとかというのは、わたしの気持ちの持ち出し方次第では掴めたり掴めなかったり.....そこを何とか掴んでこようというのが、わたしの攻め口ですけれども。そこで研究者が間主観的に捉えるべき当事者がいっぱい増えてきますと、こっちの気持ちが分散してついていけなくなってるね。やっぱり全体を見てしまうみたいになって、なかなかそこに追いついていきません。だから今、育てる者の枠を広げると言ったけども、たぶんそのところは、誤解されてしまうかもしれないですけども、研究者として同時に扱うという意味ではないですね。育てる者の視野を広げるんだけど、でもそれは今まであまりにも親と子というような狭い關係しかとらえてこなかったから、そこをもうちょっと少し視野を広げてみればということであって、そうするとこういう關係、ああいう關係が出てきて、その關係をとらえるその象面では、わたし自身はまだやっぱり、せいぜい二者のかかわり合いのところしか捉えられない。でも子どもは親だけじゃなくて保育者との關係もある.....だから、子どもと保育者の關係、子どもと子どもの關係、そういうところに目を向けていってということですが、しかし、その取り上げるところはやはり二者關係が中心、二者のかかわりをわたしの立場でとらえ

ていくというところがベースになりますね。そうでないと、なかなか間主観的に掴めない。ただ、特定の母と子の関係だけをずっと追っかけていけばよいと受け取られるように語って来てしまったことは反省しています。

で、その「子どもが育てられて育つ」というときの、その育てられる中身には、もっといろんな人が入りこんでくるし、研究者としてそこに入りこんでいきたいなということではあるんですけどね。お父さんとお母さんが子どもにかかわっているところにおばあちゃんがいる、そのように関わりあっているそのおばあちゃんとお母さんと子どもの三者の関係を、じゃあわたしという研究者がどうとらえるかという、それは直接的にはなかなか難しい。けれども、例えばそのお母さんが子どもにこういう対応をされる、その背景には、このお母さんは、おばあちゃんにこんなふう育ててもらってきたところがあって、そのおばあちゃんがそばにいる様子を見ながら、だんだんそのようにこっちに感じ取れるようなところがあるとかね。いろんなことが考えられます。そういうところで、お母さんが子どもに対してかかわるときへのおばあちゃんの影響みたいなものを取り上げていくことはできるかもしれないけども。その三者の関係をダイレクトにエピソードに描きだして行って、そこから育てる育てられるという関係を、より複雑な次元で取り上げていくというのは、ちょっとわたし、そういうことを視野に入れてきょうお話したつもりではなかったんですけど（笑）。

質問者D ありがとうございます。

司会者 それでは、質問はいったんここで止めて、3人の先生が鯨岡理論について鯨岡先生の前で語るという形態で話題提供されましたので、短くでいいですので鯨岡先生から問われた点に対しては応えていただき、それから内容に関して感じられたことを返していただければと思います。

鯨岡 できるだけ短くね。まず大倉さんの。やっぱり、わが研究室の優等生ですね。舌を巻きます。彼流だなと思って。でも、懐かしかったです。言語両義性のレポートは、わたしが非常に高く評価したレポートで、わたしの指導してる学生にこういうレポートを書く男がいるかと思って、非常にうれしく思ったことは確かなので、その話は懐かしかったですね。

たぶん、彼が今、自分がエリクソンと格闘したことと、わたしの考え方を整理して、つないで考えようとしたことに対して、わたしは特に反論するということは何もありません。ただ、実践的ということがさっき話題になりましたけども、人が生きるということの

価値とどう切り結ぶかということだろうなというふうに思っています、わたし自身は。だから、具体的に何をするか。実践というと、すぐ、何をするかというふうに考えられてしまいますけども、わたしはそういう意味合いではなくて、やっぱり研究者は、何か、バリューフリーというんですかね、没価値的なところでものを考えていきたいところがあって、だからこそ一般化できるみたいに考える傾向がある中で、やっぱり発達の領域というのは、それはありえないと思うのです。どんな発達研究であっても、人が生きるということに直接かかわっているわけで、それに対して目の前で生きている人たちの価値を、わたしという研究者がどう見てどうそれと切り結ぶかという問題から離れて考えられません。そこをちゃんとしていくということが、実践ということの意味だというふうにわたしは理解しているし、たぶん大倉さんもそんなに違いがないかなと思います。

だから、最後のシートのほうで、「自分の関係発達論ではなかったのか」の項の2ダッシュのところ、「青年自身がわけのわからないまま、状況をどのように捉え、どのような見通しを持って過ごしていったらよいのか」と、生きることの格闘のさまを自分は取り上げようとしている。それがまさに価値であり、それが実践だ、それでいいんじゃないかなと思います。で、そこが出版社に分かってもらえなかったというそのエピソードの話は大変すさまじいもので、わたしも『拡散』が本になるかならないかを巡って、出版社の編集者と3人で夕方から遅くまで3時間ぐらいやりあいましたかね。「駄目だ」という出版社に対して、「これで認めろ」って言ってね。で、大倉君は黙って沈黙する。その三者を交えてすさまじい3時間だったと思いますけど、寄り切って本当に良かったね。

で、大倉さんはその程度にして、遠藤先生は本当に遠藤先生らしく、松本さんは「クレバーな」という表現を使いましたが、まさにそういう、いつもの遠藤さんらしい形でいろいろ語っていただいて、本当に嬉しかったんですが。

実は遠藤先生の話の中に出てきた、アートかメソッドかという、あれは1998年の『両義性の発達心理学』について書評をいただいたときでしたね。「これぞほめ殺し」と思いましたね。要するに「鯨岡の方法はすごいんだ、でもこれはアートで近づけないぞ」と。「これはほめ殺しだな」と。結局、だから、「誰も近よれないものだったら駄目でしょう」という話じゃないか」ってことで大変ショックを受けまして（笑）。で、実は、それじゃあ何とか自分は方法論をもうちょっとしっかりしたものにしなければと……まだ、『両義性の発達心理学』の所でほんのちょっとしか方法論に触れていなかったんですけども、あれでは駄目だ。で、もっと方法論を錬成しなければと思いました。今から思えば、遠藤先生にああ言ってもらって、「今に見ておれ、アートじゃない」と言いたくてね（笑）、東京大学出版会からの『エピソード記述入門』につながったというのでは、改めて大変いい書評だったんだなと思いますし、きょうもそれを取り上げていただいて良かったなと。先生にだんだん

これはメソッドになってきたのかなと言っていて、ちょっとほっとしたというか、うれしいというか、そんな気持ちもあります。

それから、愛着理論との関連で言いますと、実はわたしは、先生と違って、まったく不勉強なんですよね。先生のように 200〜300 の論文を読んで交通整理して、「愛着理論は」というふうに語れるところを、わたしは何も持っていません。でも、わたしは愛着って何だろうというところは、最初から考えてはいたんですね。で、やっぱり、これは何かわたしの感覚に合わないというところがあって。だって、1950 年前後のボウルビィとスピッツをベースにすると、なぜ日本人はもうちょっとスピッツに注目しなかったのか、なぜ、みんなボウルビィの方にいつちゃったのかと思いますよ。それはやっぱり、ボウルビィが行動の言葉で語っていたからですね。「くつつくか、くつつかないか」という行動の言葉で語る。

「信頼」とか「不信」とか、そういう精神分析の用語ではなくて、「くつつくか、くつつかないか」という行動の言葉で書いていったから、ボウルビィの考え方は世界に広まり、アメリカに広まり、日本にも広まったと思うんですね。でも本当は、そこにある問題というのは、スピッツなんかもっとちゃんと考えていた。もっとスピッツに注目する学者が日本にいてもいいんじゃないかと思うぐらいなんですね。

そういう流れの中で、わたしは不勉強だったんだけど、きょうの遠藤先生のお話を聞いていると、わたしの考え方で整理すると整理できるところが、まだ愛着理論では整理できてないんだというふうなお話があって、「それで本当にいいんだろうか」とね（笑）。で、わたしがだいたい考えていたことは、きょう遠藤先生にみんな言っていて、そういう点ではまったく違和感がないんです。例えば、愛着理論は子どもの内的な表象の問題として愛着の問題を考えたけれども、ふたりの間の間主観的な関係そのものには、愛着理論は踏み込んでいないんだというのは、わたしもいろんなところで言ってきたんですけど、本当にそれって、わたしの一方的な主張としてはそう言ってきたけれども、愛着研究をやっている人が本当にそう言っているのかなと思って、ちょっと心配してね（笑）、聞いてたんですけども。でも、そう言っていただくことで、こっちとしては不勉強ながらそれでええのか、っていうことで安心したところはあったんですね。確かに今、いろんな人がインター・サブジェクティヴィティという言葉を使うんですけども、本当に「違うなあ」という感じがするんですね。まさに「器の中」という先生のお話のとおりだなという感じがして。で、「機械の目」という言い方をされましたよね。本当にそういう感じがします。やっぱりもうちょっと、本当の意味の関係論の立場というのを主張したいなあと思います。だから、わたしも書いたことがあるのですが、精神分析の立場というのは、個の中の関係ですよね。個の内部において関係がどうなっているかということは問題にした。けれども、本当に関係そのものを問題にしたわけじゃなかった。行動科学は個と個の相互作用は問題

にしたけども、本当に個と個の関係を問題にしたわけじゃない。で、やっぱりそれを、個と個の間主観的な、内面の関係としてその関係を論じる必要があるというのが、わたしの主張なんですけども。きょうの遠藤先生の話聞いて少し不勉強ながら安心できたというのは率直な実感です。

それから、森岡先生からもいろいろなことを言っていただきました。わたしは、どこに書いたか忘れちゃいましたけども、わたしの根っこにあるのは、わたし自身ウェルナーだと思ってますし、ウェルネリアンだと思ってます。いちばん影響を受けたのはメルロ・ポンティかも知れませんが、大きな考え方のベースは、カッシーラー、ウェルナーの系譜の中にあるなあと思ってます。で、これは、わたしの周辺にいる院生の人には常々言ってるんですけども、1920〜30年代のヨーロッパにはすごく豊潤な思想があった。ゲシュタルトの思想もその1つで、そこに、有機体論—全体論的な視点というの也被まかれていたと思うんですね。本来、心理学はそういう方向に発展していく可能性があったのに、その可能性をいっぺんにひっくり返したのが、やっぱりナチスドイツであって第二次世界大戦であった。で、その当時活躍したユダヤ系の学者たちがみんな散り散りになって、アメリカに亡命して、そこで日の目を見ずに潰れていく。そういう偶然の歴史の中で、アメリカの行動科学が世界を席卷して、なぜか日本の心理学もみんなそこに右にならえをしていった。わたしはそれは「偶然の歴史だ」というふうに、ある意味思っていて。戦争がなければとか、そういうことを考えてみれば、ずいぶん変わった心理学史が成り立っていたんじゃないかなっていうふうに思うんですね。

わたしはなぜか学生のころ恩師が取り上げたウェルナーを勉強して。で、ウェルナーから芋づる式にカッシーラーのあたりをいろいろ勉強して。そこからゲシュタルトへ。ゲシュタルトも、われわれが教科書で習っているような、ああいう知覚にベースを置いたゲシュタルト論だけじゃなくて、有機体論的なゲシュタルト論者が当時はいっぱいいて。そういう話をする、と、すごく元気が出てくるというか、嬉しくなるというか、そういう話はうちのゼミの人たちは何回も聞かされていると思うんですけどね。それを誰かやってほしい。もうわたしはこの歳になってできないけれども、誰かやってほしいなあと思います。心理学の歴史というのは、ワトソンに始まって、というような.....あるいはヴェントから始めるにしたって、結局は行動主義、認知行動科学というふうな系譜をたどってきましたというような心理学者がほとんどですよ。『そんなん違うわ』と言いたいところがいろいろあって。で、その中に、たぶん自分の考えも位置づけられていくんだろなあと思います。

やっぱり、自分だけがオリジナルに考えるということは絶対できないわけですし、人の思想の影響というのは受ける。特にメルロ・ポンティは、ウェルナーやカッシーラーをししば自分の学位論文の中で引用しています。『ソルボンヌ講義』のなかでも引用していま

す。ですから、メルロ・ポンティの考え方自身、1920〜30年代のヨーロッパ思想を引き継いでいますね。わたしがメルロ・ポンティを受容しやすかったのも、ウェルナーという土台があったからだろうなというふうに思っています。たぶんわたしの、全体論的（ホリスティック）、有機体論的（オーガニスミック）な考え方というのは、特にそういうところから出ていると。

今、森岡先生から、バイタル・センセーションという懐かしい概念を紹介していただきました。ウェルナーを読んでいると必ず出てくる概念です。力動的な、そして有機体論的な、そして全体論的な発想というのは、ウェルナーの考え方の中に入っています。バイタリティ・アフェクトを言いだしたのはスターンですけども、スターンよりも早くそういうところに注目していた心理学者はいたんです。ヨーロッパにそういうルーツはあるのです。誰もそれ言わないですけどね。まるでスターンのアイデアみたいに精神医学の立場の人たちは持ち上げますけれども。やっぱりもうちょっと、時間の余裕があれば、心理学思想史みたいなものは、ぜひともやってみたいところがありましたね。森岡先生のお話を聞くにつけ、そういうことを思いました。

司会者 どうでしょう。何か応答することはありますか。

大倉 応答することはない（笑）。

司会者 一言どうですか。

大倉 一言？ 一言すると、難しい問題を言うということになっちゃう。

司会者 投げかけるだけでも。

大倉 じゃあ、言うだけ言います。わたしの発表の中でも取り上げたんですけども、どうも先生の出される概念というのが、どちらかというと微笑ましいエピソードが多かったということもあって、やや教条的にとらえられてしまって、「間主観的に子どもの気持ちをつかまねばならないのだ」とか、それがたぶん最たる例の大きな誤解というようなところだと思うんですけども。そこで先生がもうちょっとゆったりとした、「子ども―養育者」関係ということで、相互主体性ということ、言われてるんですけども。これとても、やっぱり、やや、「そうあらねばならない」というような形で、頭の中でとらえられてしまう可能性があって。そうすると、「もうほっとけばいい」とか、どっちか極端に走っていくとか

そういったことになっていって……関係発達論は実践的な理論であることは間違いないと思うんですけども、そのときに、いざ実践に生かすというときに、どういったふうに概念装置を工夫するとうまく伝わるのかと。先ほどの方がおっしゃられたこととも関係するかなと思うんですけども、誤解されないように……。『育てられて育つ』か。そこらへんでお考えとかないでしょうか。

もう1つは、要するに、どうやって生かしたらいいのかってことでね。先生の概念というのを、わたしたちが……僕も間違えたことがある。『コペルニクス的転回をしなければいけないんだ』ということをやって、ひどい目に遭ったことがある（笑）。

司会者 ひどい目というのは？

大倉 ひどい目というとおかしいんですけど、ちょっとつらい目があった（笑）。あの、いろいろあるんです。

一同 （笑）。

大倉 そういったときに、いかに生かすのか。鯨岡理論をいかに生かすかというところで、まだ一言言うことがあるんじゃないかなという。はい。

鯨岡 難しいことを聞かれたなあ。誤解されないためにというのは、なかなか難しいことで、誤解は付きものです。やっぱり、ちょっと読んで分かったと思うところから誤解が生まれてもそれ仕方がない。だから、もう少し全体を見て理解してくださいと言うしかない、居直った言い方ですけどね。ただ、どうしても理論というのは、特に実践理論というのは、強い理論が良い理論みたいなところがあります。「こうすればできるようになる」というと、「じゃあ、もっとさせて、もっと早くできるようにしよう」というふうに。特に実践と切り結ぶ理論というのは、すぐそうなっちゃうところがあって。例えば、発達は早ければいいというような価値観が潜んでいたりするんでしょ。そういうことにどこかでブレーキかけなくちゃいけないということがあって。たぶん、そこを考えていくときに欠かせない概念として、やっぱり *good enough* というか、「ほどよさ」という考え方が必要かなと思いますね。「もっともっとうこうすればいいんだ」とならないために、ブレーキかける。中庸理論といいますかね。一方の極の「ほっとけばいいんだ」という考えや、他方の極の「もっといっぱいさせれば、いいことがいっぱい起こる」みたいな考えのどちらかにぶれないためには、いちばん良いのは「ほどよい」働きかけなのだと考えるのが、その中庸理論で

す。しかし、そのように言うと、いつも「どこまでがほどよいんですか」と必ず言われるので、「ここがほどよいところだということはない」と（笑）。でも、やっぱりそこに、ある種の「ほどよさ」というのがあると思いますね。例えば、子どもにける愛情なんていうと、たくさんあればいいんだという話になっちゃうでしょ。でもそれではありません。じゃあ、「少なければいいの？」というそうでもない。だから、人と人とかかわっていくときというのは、あっちかこっちかというのではなしに、中間点みたいなものをいつも視野に入れておくようなことが、実践上必要かなって思います。それが1つですね。

それから、「ねばならない」という問題。「コペルニクス的転回をしなければならない」とか、「そういうふうにしないと人間じゃない」とか（笑）、そういうふうに捉えられると、非常に困るんですけど。いつかどこかに書いと思いますが、結局、「わたしはこういうふうはこの場面を生きてきました」という観点でしか書いてなくて、だから、わたしがこう生きてきたことを皆さんもこう生きなさいというつもりはまったくないですね。だから、そこをどう生きるかというのはまさに自分で考えていくしかないところであって、「こうなれば必ずいいことになりますよ」とか、そういう話をしているつもりはまったくないですね。だから実践というものをマニュアル化して、こうすればうまくいくみたいな、一般的言説化を目指す流れ自体を壊していきたいと思いますね。そういう一般化の流れが起こってきたら、必ずそこには何かインチキがあるぞというふうに疑ってかかる。やっぱり個別具体のところ、常に考え直していくというのがわたしの目指すところです。だから、「ねばならない」をどうすればいいかという辺りは、やっぱり人の考え方に即して自分の生き方を整えていくというような考え方が見え隠れしますよね。そうではなくて、やっぱりその人が本当にその人らしく主体として生きているならば、その都度その都度その局面で自分が責任を持ってその場面を切り抜けていくしかないんだ、と。究極的に伝えたいメッセージはそうですね。わたしよりも遅れてくる人に対して究極的に伝えたいメッセージはそれですね。自分もそうしてきたし、あなたもそうして生きたまえ、ということを伝えていくのが、関係発達論からのメッセージではないかなと思っていますが。すいませんこのあたりで。

司会者 それでは遠藤先生。

遠藤 何をお返しすればいいのかわからないですが。今、大倉先生がご指摘くださった前半のほうというのは、ちょっと自分もいろいろと考えていた……考えていたというか、感じていたことがあります。例えば、鯨岡先生の非常に魅力的な術語というか概念に「成り込み」であつたりとか、「志向の越境」であつたりとか、「情動の舌」だとかというよう

な言葉があるわけです。で、鯨岡先生ご自身は、ご著書の中ではまさにその主体性というようなことを、要するに、非常に強調しながら書いているんだけど、その言葉がひとり歩きしたときにどうなるか、ということを、いつも考えているというか。実はアタッチメント研究なんかでも、感受性というような概念というようなことを話すと、「じゃあ、感受性豊かであればいいんですね」という話になるんですけど、「じゃあ、敏感でありましょう」「敏感になりましょう」という話にどうしてもなっていく。で、実は「成り込み」とかにしても、あれは要するに成り込もうとして成り込めるものというよりは、なぜか成り込んでしまっているという状態の強調なんですよ。あるいは「志向の越境」だって、やっぱり、志向がいつの間にか越境してしまっているというものだし、「情動の舌」を伸ばすというよりは、ある情動経験のもとで自然と伸びてしまうというものであるにもかかわらず、意図してその情動の舌を伸ばそうとするとか、あるいは成り込もうとするというところが誤って伝わってしまうと、逆にすごく、子どもに対するスタンスとしては、欲求を感じ取って何かをするとき、その欲求というか、欲求する主体というようなものを受け止めて何か返すというよりは、欲求を先取りすることが、さもないことであるかのように受け取られがちというのが、非常にやっぱり危険なものとしてあるんだと思うんですね。そういう意味で実は、最後というよりは、いちばん新しい段階で、鯨岡先生は相互主体性というところを中核的にものをお書きになったところで、ある種、歯止めをかけようとしているところもあるような気がするんです。先生が現実にもそういうふうに使われているかどうかは、ちょっと伺ってみたいと分からないんですけども。

最後に相互主体性という概念ですね。欲求の先取りをするというのは、主体性をまさに殺す行為ということですので、先生の言葉がひとり歩きすると、先生の、暗に、われわれにいちばん伝えたいことが逆の方向に、ある種受け取られて、実践されてしまうという危険性というのは、すごく感じているところがあって、そういうもののひとつの歯止めとして、相互主体性というふうな概念というものが、あるというふうに認識したところも私にはあるんですね。あるいは、それが提示されてホッとしたところも、正直、個人的にはあったということがありました。ただ、それさえももしかしたら、それこそ「べき論」ということになってくるととても危険で、やっぱり誰かが、誰かがというよりは、それを受け取る側がどういうふうにそれを生かすかというところの部分のメタ理論というのを堅持していかなければいけないところがあるのかなということをすごく感じたということがあります。

あと、いろいろ話したいのですが。そういうことがひとつあるということと、あと、先ほどの議論を聞いていてすごく思ったんですが、質的研究のやっかいさというかややこしさというか、そのエピソードというようなものを記述しようとする段階、いわば、エピソード

ードというものが特別なものとして、要するに、自分の中で非常に鮮明に浮き上がってくる段階には、ある種、先行してひとつの理屈がすでに成り立っているというか、先行して、成り立っている理屈がある種、エピソードを選ばせているという側面が強い。それは時間の流れであるにもかかわらず、しかし研究の上でそれを提示していく段階では、やはりエピソードから考察が生まれたように書き込まなければいけないという、その部分というのがすごく難しいというか。逆にいうと、読める人は、ある種、そのエピソードがこういう考え方を生み出したというふうな時間の流れで考えてしまうんだけど、現実にはそうではないところが、たくさんある。拾いだされた事実というのは、その段階で理論の負荷を負っているものであって、その非常にパラドキシカルな部分というところを、どういうふうに伝えたらいいのかということもあるし、どういうふうに……ある種、これからそういうものを読んで、自分で質的研究を実践していく場合に、こなしていけばいいのかということですね。それすごく、誰もがうすうす感じていながら、なかなかあまり言葉にしないところで。無責任といえば無責任に言うんですけども（笑）。そういうところをすごく感じたなというところと。

あと、きっと潜在的にもしかすると、エピソード記述ということを考えたときに、特に先生が示されている全体的なある種の概念図、理論図というところに照らして考えていったときに、例えば、個のケース、個といった場合には、個人個体という意味ではなくて、関係性というものの単位にして考えたときに、その関係性というようなものの全体図を描きだすときに、エピソードの記述の範囲ですね。どの範囲まで拾っていいかというところの、そこが実は非常に難しいというか、もしかしたら匠の技かもしれないと思うところがあって。確かにエピソードの記述の方法というところに関していうと、少しずつ分かってきたところはあるけれども、その範囲というのがまたひとつすごく難しいものとしてあるなというのがあって。どこまでのエピソードで、あるいは、そのエピソードのどこまでを書くかという。書いたらいいのかという。あれが意外に難しいなと。いろいろ、いろんなディスカッションを聞きながら思ったことがありました。実はもっとあるんですけども。

司会者 鯨岡先生。

鯨岡 わたし？ 今、遠藤先生の、誤解を招かないようにというところは、『ひとがひとをわかるということ』の中では、それなりに触れたつもりなんですけれども。確かに「情動の舌」については、間主観的に掴んでいるという状態を少し反省的に考えてみれば、こんなふうに気持ちを持ち出していたからできたんだよね、というふうに言える。わたしはそんなふうに言っているのです。でもそういうふうにわたしが言っていたのをひっくり返し

て、「情動の舌」を伸ばせば間主観的につかめる、となるわけですね。人の理解をそういうふうにスライドさせて誤解するというのは、本当にあり得ることだと思いました。だから今回、かなりそこは気にして書いたつもりです。そして今、相互主体性という考えにたどりついたのは、ブレーキかける意味があるんじゃないかというのは、そのとおりです。それはわたしも意識したところです。

それから、先生は今エピソードを取り上げたときにはすでにそれは理論の負荷を背負ってるんだということを言われました。ある意味、ハンソンのいう知覚の理論負荷性ということそのものだと思うんですね。わたしたちがものを見るということは、やっぱり全部、何らかの理論を背負って見てるわけで。そういう意味では、それ抜きには考えられないと言うしかありません。

そして、どの範囲を書くかというのは、本当にやっぱり難しい問題でね。これはまだ、はっきりわたしも方法論の中では言っていません。例えば、学生や院生諸君が書いたエピソードに対して、「これ、ちょっと長過ぎるよ」ってね。長ければいいってもんじゃないのと、でも、じゃあどこまで書けば（笑）。それはやっぱり、読む人が読んだときに、冗長だとかえって、何がポイントなのか分からない。で、簡潔すぎると、その状況が分からない。だから、そこも、「ほどよく」じゃないですけど（笑）、どこまで書くかというのは、結局は読者への効果ですよ。読者への効果を、どういうふうに書き手が判断して書いていくか、といったところになるんじゃないかなって思っていますが。確かに、そこはまだ、やはりアートのかもしれない（笑）。

遠藤 いや（笑）

森岡 鯨岡先生のおっしゃる **vital, vitality** この生命性というんですかね、これはやっぱりわたしもこだわりたいところですね。今までのディスカッション、わたしも口を挟みたいところがありましたけれども。松本さんがおっしゃたように、リフレクションすることで、すでに図は変わってしまうということですね。時間の経過の中で変容してしまっている。この問題をどう解決するかということなんです。今、遠藤さんがいわれたパラドックスという問題も同じでしょうね。たぶん質的研究の難解さというのは、書くときにはすでにそのエピソードは終わっているわけで。書くこと、再現の困難さということに、誰もがぶつかりながら苦労しているんですね。そのときにこそ、生命性ということが重要だとわたしは思っているんですよ。私たちの対象はいつも生命のあるものです。

Biography はふつう伝記と訳されますが、これを生命の記録、バイオーグラフィとしてみたい。生命をグラフィックする。こういう書き方への試みはすでに多くの人がなさってい

ます。生命性という言葉を書くという作業それ自体にとりこんでみたい。書くこと自体に生命の営みが入っていますよね。えらい飛躍しますが。書き続けていくことで方向性が見えてくると言うことがある。そういう意味で書くことは全身の知でしょう。書かないと分からない。こういったことはよく作家たちが言っていますね。小説も構想はあらかじめあったとしても、やっぱり書かないと分からないそうです。書きだすと出てくるんですよ。エピソード記述もかなりそういう部分があるのではないのでしょうか。で、今の話でいえば、その書くなかにすでに実はメタが動いていると鯨岡先生がおっしゃる。これは当然だと思うんですよ。読み手に分かるように書く。ここに再帰性の運動がある。生の営みの根底に触れるものです。自己再帰性の中で自己を作りながら次を生んでいくんですよ。こういう原理なんですね。

自己再帰性、リフレクションという概念がよく話題になっていますけども、これに注目したのは、ドイツの18世紀のゲーテあたりの学問なんですよ。生命の形態生成、自己形成は二重の自己再帰性の運動であるという理論、この伝統はおそらく20世紀初頭の哲学、現象学、心理学へと脈々とつながっているんですね。リフレクションは、生の自己形成につながっているという理論なんですね。生命は自ら差異性をつくりながら、自己を生む。鯨岡先生はこのような動きをつかみながら書くことを指導されているのでしょう。「みんなで話題にしないと駄目だよ」とか、「聞くように、読み手が分かるように書きなさい」と。メタ、まさに再帰性の問題が書く営みの根本にあります。

同時にもうひとつ大事なものは、心ですよ。先生は心という言葉はあまり使ってらっしゃらないけど。きょうわたしは、時間性ということを話しましたが、ミヒヤエル・エンデというドイツの重要な童話作家ですけど、『モモ』という作品を書いています。心って何かといたら、時間の感覚なんですって。心は時間を感じる感覚と書いてあるのです。人の営みは心を使わないと記述できないですよ。つまり、エピソード記述についてどこかに書いていらっしゃいましたが、「エピソードは自らに訪れるのを待たなければならない」ということを鯨岡先生はおっしゃる。今ここに、一回性のものを今ここに、もう1回意味を持たせて再帰するために、意味を結ぶためには待たなければならない。意味がやってくるのを待つ。まさに時間の問題が入ってくるわけですよ。つまり心は時間の感覚だというけれども、時間を描くには、心を使わなければならないし、待たなければならない。このあたり、あいまいな言い方ですけども、エピソード記述そして先生の関係発達論の中には十分に動いている。

心理臨床の現場ですけども、実際には見通しの立たないわけの分からないことがでてる。相手の方の話が、言葉だけ明晰だけどよく分からない。それが何か形を取ってくるには、何度も回を重ねていくうちに見えてくるんですね。相手が語っていること、提示し

てくることは、まだ未完結 **Un-completed** あるいは、**Un-formulate**、まだ形になっていないものとしてとらえる。言葉を **Un-formulate** なものとして聞きながら、十分にそれが形を作ってくるまで待ち、そこに付き合うのが主に臨床家というものの役割ですし、そのときに聞き手というのは、相手の提示してくるものに対してかなり積極的な構成をおこなうと思います。こういうところにも、かなり接点がありそうな今日の議論だと思うんですね。

もう1つは、いろんなご質問の中ででてきたことですが、当事者であることと参与観察者であることとの関係は、間主観性の問題を議論するときにはどうしてもはずせないと思います。たとえば教師が自分の現場をエピソード記述できるかという問題です。保育者自身のご自分の保育の場を、書いていらっしやいましたね。あの作業って大きなディレンマをかかえると思います。親が自分の子育てを記述できるかのということです。この問題は参与観察で記述することの議論のなかで避けられないと思うんですよね。質的研究がこれだけ、いろいろ本が出回って盛んになっているけども。実は臨床のほうは、この質的研究に対しては、かなり複雑な思いで見えていますね。ある意味ではわたしたちは参与観察者じゃないんだ。この場で変化を起こさなきゃならないんですね。つまり臨床家も当事者なんですね。教師と同じ位置にいます。当事者は間主観性をどう感じるかということと、参与観察者がどう感じるのか、この問題に関してはきちんと議論しないとだめだと思っているんですね。今日の先生の講演の中で、やはり保育の現場や教育のいろんな場を回られ、その場に直に入られている。これはスーパーヴィジョンの役割でもあるし、最近の臨床心理学のスーパーヴァイザーもなかには、どんどん現場に入って、当事者と担当のセラピストと共に解決への道を探るという方法も試みられています。コラボレイティブ・アプローチといいまして、当事者も自分の事例検討に加わって、コンサルテーションを受けていくという方向性も出てきているんですよ。ほとんど先生のなさっていることと近いんですね。こういったこととの接点もまだこれからですね。日本ではまだまだ全然そんな議論されていないと思いますが。これからの課題だと思っています。時間がきていてすいません。

司会：まだ議論が尽きないところですが、一旦ここで全体の質疑を終えたいと思います。シンポジウムでは聞けなかったけれども、個人的にぜひ聞いてみたいことがあれば、簡単な懇親会を準備していますので、この機会にぜひお聞きください。

6時間という長丁場でしたが、とてもいいシンポジウムになったと思います。

鯨岡先生をはじめ登壇者の先生方、ありがとうございました。

